

2 へ自分ならではの知り方

- i 「われは何者か」
- ii 思考の型
- iii 役割の型
- iv 理由なき好物
- v 記録せず記憶
- vi 先人の教え
- vii 自分に見せる

宇宙に比べるべき容易ならざる大切なものが、自分自身の中にもあるのである。それらのもについて私たちは何を知っているであろう。実は何も知っていないのである。

— 中井正一「美学入門」

「われは何者か」

ゴッディン。の絵のタイトルをよく引用し
ます。われは何者か、われはどこのへ行くの
か。われはどこから来たのか、われは何者か
働き生きたいとよく言うのか、自分らしく
も何ができるのか。自分らしいのか、自分ならではの

は、われはどこへ行くのか。そのために
な、ければいけない。先の1.で書いたよう
に、生活の中で身に精神性と資質を土台
に、思考と行動のクセに、自分文化を言っ
てもいいし、あるいは「流儀」をまた
も「習慣」でもある。いかに「流儀」に
スにも慣れ、その人なりの考えや認識がべ

自分側の内側に備えたものと、環境の中
に。自分の内側には「自分文化」や「流儀」
慣。言葉で表すには「自分文化」や「流儀」
は。当たり前の文化に惑わされない。うっ
り。葛藤し、人の文化に惑わされない。うっ
み。葛藤し、人の文化に惑わされない。うっ
はず。葛藤し、人の文化に惑わされない。うっ
身に堪えます。仕合わせじゃない。では、心

やりたいたことが決まったので、診断士の資
格を捨てたという人がいます。その決意
を話したとき、人ごとなに
良かっただけで、思いついた。自分軸をさだめ
が。生涯の探究するマがあるというの
です。生涯の探究するマがあるというの
は、時間の質、人生の質を高めるのではな
いで、時間、質、人生の質を高めるのではな

「われは何者か」。自分以外の人や世界
が自分を映す鏡になる。自分以外の人や世界
問うことが人にも自分にも。自分以外の人や世界
き。自分が人にも自分にも。自分以外の人や世界
か。自分が人にも自分にも。自分以外の人や世界
面。自分が人にも自分にも。自分以外の人や世界
気。自分が人にも自分にも。自分以外の人や世界
ない。自分が人にも自分にも。自分以外の人や世界
ない。自分が人にも自分にも。自分以外の人や世界

アメリカ生まれの知覚心理学者ジェーム
ズ・J・ギブソンが唱えた認知理論「ア
フォーダンス」。

「五感があるから世界があるのではない。感
覚者は世界に接触する一つの手」

「生態学的実在論」と説明されるこの考
えを大っかみでとらえて解釈すると、「こ
の世界に、環境に、自分なりの意味づけを
する。それが人生。さあ、世界に接触した
まえ！」。

思考の型

決めた時間に決めたことをする日課をよくこなし、その積み重ねによって、自分の創造性を磨いていく。線型の人からすると、面型の人はちよつとわけがわからないと感ずるかもしれません。

点型は、ある種、天才的というか浮世離れして、いるというか、思いつきが主のタイプ。前後の關係がまわりの事情、時には経過や結果に頭がまわらず、回ったとしてマンになり得る一方、先のことを考えて仕事をするには不得手。だからよい参謀役、アシスタントがいて吉、という人。

面型の人は、新しい仕事を教えてもらう場合、自分の仕事、がどのポジションにあるのかを知りたい。まずは全体像を教えてほしいと思ふはず。線型の人、は自分のやる仕事だけに、でも事足りる。全体から話されると逆に、点型の人は、一つのことに集中して、「好きにやっついていいよ」と言われる環境が一番。特技や専門を備えることが大切。

思考の型に注目した最初は、診断士の受験勉強の時。グループ学習でメンバ―それぞれ、の模範解答を行頭文字をまず憶えて、○字の模範解答を行頭文字をまず憶えて、行ごとに暗記しようとする人にはビツク。法は人ごとに違ふ。そう了解しておく、お互いの才が生きてきます。

役割の型

① 表に出る人

②裏にまわる人

③ 表と裏を行き来する人

びる人。①は、世の中の表に出る人。②は、脚光を浴びる人。裏で支える、あるいは自分の生活をしたちを、それで支える、あるいは自分の生活を生きて、それ自体で社会を支えている人。③の人は、①の人たち、表がすべてでないことを知らせ、②の人たちの存在が際立つことをあつてこ自分たちの存在が際立つことを伝える。そういう役回りをする人。

表に出る人、裏にまわる人、そして、その間を行き来をする人。この③の人たちは、決して「けっしては多くはないはずですが、必ずどこかにいる。世の中のバランスをとつてゐる。」それは人間社会の普遍的なものかもしれません。これまでに数々、そういう人に出会いました。こういう人たちがいて、がんばっている人を引き上げられていくんだと感じたものです。ある意味、世の中うまく出来ている。

実際に出会った③の人には、大企業の管理職、公務員、第一線の経営者などがいて、言うことには共通点がある。

「やっぱり、善い人だがんばっている人は応援したくなる」

前にも必ず現われ、よき理解者になる人が、
 の人にはあたるのかもしれないが、③

「好意的暗躍」。相手のためになるように、少々の間と労力、時にお金も使いたい、本人にプラスになりそうな情報を提供する、よかれと思う人にその存在を教え、仕事の機会をとりもつ。そういうことが自然にできる人。これからの時代、そういう人は少なくなっていくのかと心配になる世相ですが、否、ずっとこれからも一定の割合で現れてくるに違いありません。

は、このことを考えるうちに、わたしの誇り
 らためて感じました。今も温かく見守って
 もらっているし、また別な誰かのために、
 少なからず尽力している。いつかその一人
 に、「いつも本当にありがとう、あなたはいま
 す」と言ったら、「いやー、あなたはあな
 たで同じようにやっているから、それでい
 いんじゃないですか」。

この信頼に、これから応えていくことが残り人生の一つのミッション。

理由なき好物

のモノや柄も飲み物だけ、趣味は、その他の、
 ですけど、なぜその好きなのか、理由を
 尋ねても、はっきりとした答が返ってこない
 のが常です。人によって真面目な顔で
 「前世は（な）になに」だったから、
 「前人もいました。別な人は、
 好きなこともあって、好きで、
 しょ、好きだから好き」。
 「シングルの将来寂しくない？」
 思ったのか急に「そう感じていた友人。何
 に返した言葉は、その「そう感じていた友人。何
 こうしていいか」という「そう感じていた友人。何
 ね、君は結婚しない以前の会社員時代、先輩か
 ら「君は無意識に返したのか」と聞かれて、
 ら「君は無意識に返したのか」と聞かれて、
 すれど、妙な人との結婚して、自分の精神性が損
 どの、妙なのは嫌で、これは、深く考えての返事
 われるのではないだけに、これは、深く考えての返事
 では、嫌で、これは、深く考えての返事
 え、結婚して家庭をもつことを当たり前の考
 金に、関心がある人、現実的なお金の後、
 にも、考える人、精神的な糧を求め、人走
 人も、何に意味を感じ、糧を求め、人走
 てる。相当に違います。糧を求め、人走
 相当に違います。糧を求め、人走

画家の猪熊弦一郎さんが「カメラの前の
 モノローグ 埴谷雄高・猪熊弦一郎・武満
 徹」（マリオ・A）の中で、

「画家は、いい絵を描くほどだめになっ
 くんです。減んでいくんです。いい絵を描か
 いほど絵が売れていくんです。これは不思議な
 現象です。画商でも、誰でもわかる絵を売ると
 ころが繁盛するんです」。

絵を描くという業は同じでも何のため
 描くのか、描く意味はどこにあるのか。そ
 の根本的な考え、価値観によって、画家の
 活動様式も違う。

売れる絵に意味を感じる画家は、そうい
 う絵に価値をおく画商とタッグを組むで
 しゅう。精神と行動の一致です。自分の
 メッセージとして絵を描こうとする人が、
 仮に、現実の生活に描かれて、売れる絵を
 描き始めたとしたら、場合によっては精神の破
 綻をきたします。

当たり前の精神、人間観、人生観、社会観、
 根本的な精神、人間観、人生観、社会観、
 仕事観など等。独立したことで、それまで
 出会わなかった人を出会い、自分を映す結
 果にならなければ、時間的、精神的、労力的消
 耗は少なく、済んだを思う現在です。でも
 これもまた、わたしの「自分ならではの道
 程なのだと納得しています」。

例えばこうです。小学二年生の夏休み。太陽が一番高い昼下がり、裏庭の縁台にのそべり、ひとり空を見る自分。雲はあったかなかったか。ただボーと何を考えて眺めていたのやら。しばらくして今後は地を見える。蟻が列をなしてキャラメルのかけらを運んでいる。その行く先を目で追っている。小さな蟻たちが今ここにこうしてコツと生きる営み……。

今に至る原点がそこにあると、自分に目が開いたのはそれほど前ではありません。その他にもいくつかの記憶が現在を物語る。そう思えるということ、へ自分ならでは、の道を外してはいないということ。外していても、それもありな人と思える人はそれでよし。そうでない人は自業の道を真剣に考えた方がいい、自分を守るために。

間が日常の中に哲学がある。そう気づいた瞬間に仕事してゐるのに自分だけ楽しようと緒にする相手。自分さえよければいいのかと憤慨する気持ちの一方で、感情的になつては意味がない、精神衛生上よくないと思う。合理的にとらえて生活する。考えてみれば、社会生活は人間学習する。連続、哲学の時間は日常生活の中にあるものなんだ、と。

「モンテーニユ初代エッセイストの問いかけ」（荒木昭太郎 中公新書）は、モンテーニユの魂が茶者にのりうつったような力作で、モンテーニユの金言が小気味よく、味わい深く紹介されています。読み返して、次の一文が目飛び込みました。

自分観察。へ自分ならでは、を知る一番はそれではないでしようか。自分への関心は、人への関心につながる。自分に対して見過ごしていたことを取り、ならば人はどうかと氣にとめる。何かを感じ、考え。その経過を書き綴ると、「人間は見えるもの、動くものに反応する」(アラン・カイ)。

自分に見せる

「人間は見えるもの、動くものに反応する」

日本でもインターネットが広がり始めた頃、NHKで情報社会到来の特集番組が放映され、その中でアラン・カールティス・ケイが言っていたことです。画面にむかい、今さらながらに気づいた感覚で聴いたのこの一言、以降よく引用しています。彼はパーソナル・コンピュータの概念を世に送り出した科学者。科学者は時々、一般人の目を開かせてくれます。

今の自分の状況に、こんなはずじゃなかった：、これでいいのだろうか：と問うている時は、われに還っている時。過去と未来の「間」にいる時。

「前の時間がそのまま流れているのは滞っているのである。切って捨てて脱落して新しく生まれるからこそ生きているのである。」間」というのは、この生きていることを確かめる時間の区切り、切斷、響きなのである」

「美学入門」(中井正一)のこの一節も、目を開かせてくれます。学者や論者の役割はこういうことでしょうね。暗黙のうちに人々がそう実践していることを、論じて文字にする。読んだ人々たちは後押しされたような気持ちになる。自分で考える際の手がかりになるような本。本に求めるものが何かというのも、へ自分ならでは。

あなたが今、「間」にいるとすれば、自業の節目かもしれませぬ。そうでなくて、も、また一つ未来を拓く転換点です。さあ、へ自分ならではの未来を創りましょう。「間」にいるということは、頭の中では過去をふり返り、過去をふり返れば、未来を展望している。人間の思考はそうできています。

「話すこと、書くことは魂の労働、特に書くことが大事」(若松英輔)。

縦書きのノートを一つ用意しましょう。そこへ手書きで、「記録せず記録」して、象徴的と思える過去の出来事も書き、その経験がもたらしたものは何だったか書きましょう。場合によっては過去の手帳を取り出し、時期を確認したくなる。時系列でまとめたくなくなる。どうぞそうしてください。言われなくても、そうするはず。

「若気のいたり」満載の昔のノートにも手を伸ばすことになるかもしれません。よく読み進めるうちに、ああ、根本はかわってないんだなあ。過去から現在を書き出し、かつて書いたものを目のあたりにし、思考が向かうのは未来。自分で未来にあり、アリの向かう未来。それを未来に書き出し、前に、自分を見せ、反応させる。人を動かす前に、自分を動かすことです。